

---

# 私が得た世界

陽華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私が得た世界

### 【著者名】

陽華

N2934E

### 【あらすじ】

17年間、化け物として国に使われていた少女が見た世界は、とても穢く、とても美しかった。

## chapter 0 - 1 : 普通を望む世界

初めて　　を壊したのは、幽閉されてから1ヶ月後。  
ターゲットは、産まれたばかりの赤ん坊だった。

あの子も、私の仲間だつたのに……。

なのに、あの子は私のせいで、小さな冷たい塵<sup>ゴリ</sup>と化した。

それからの17年間で、私はいくつの塵を作り出したのだろう。彼らは私の色を流しながら、憐れむ様に朽ちていくのだ。

カリーナ<sup>暦</sup>67年。

物語はここから始まる。

この世界は、正常を望んでいた。私がしてみたら、何が正常で何が異端なのだろう。

世界は3つの大陸から成り、それを一つに纏めているのが、セントラル・カリーナ・だ。

全ての理がここから成り立ち、そして思ひがままの国。

私はそこに居る。

誰にも知られず、誰にも認められず、暗い塔で存在している。

唯一世界を覗けるのは、塵を作り出す時のみ。体を清め、この時だけ衣を纏い、そして言われるがまま、塵を作り出す為だけに赴く。逃げる事はない。私が逃亡する事は、　　を奪われるから。

とは、何だつただろう。

.....

まあ良いや。どうせ私は、化け物だから。

彼等が固執する、平凡からは欠け離れた化け物。

この眼も、この体も、流れる血も、全てが化け物だから

我等が崇め、我等の全てである神は何に於いても平等に授けて下さった。

それにより、時の流れ、肉体の限界、魂の再来、これらは皆が同じ瞬間に迎えていた。悲しみ、喜び、憂い、憤り、様々な感情を分かち合っていた。その中でも我等 - ヒト - は、平等な筈の神が気に入る程の高等種族として存在し、神の創りし楽園 - エデン - の主となる。それがこの世界、 - ルディアーデ・アフェクシア - である。

しかし、何が切っ掛けとなつたのだろうか。我等 - ヒト - の中に異端が産まれた。初めは唯一人であったそれは、次第に数を増やし我等に紛れる知恵を身につけ始めたのだ。

我等は必死にソレ等を排除しようとしたが、知恵を受けたソレ等はする賢く、傲慢であった。

そして遂に、神にその存在を知られてしまう。神は嘆き悲しみ、我等を信頼するからこそその試練を与えたかったのだ。

異端を滅殺する使命と、異端が楽園に住み着くのを許した罪として、滅殺し終わる迄我等に不平等な命の時と、分かち合えない心を。

我等が再び神に愛される為には、全ての異端を排除しなくてはならない。

異端を許してはならない。

何故なら異端は、神に仇なす者だからだ。

その身は穢れ、その心は淀み、我等の父を受け入れない異端。

全ては我等の、そして神の為

『アフェクシア神書 意義』より

\* \* \* \* \*

「はっ！…なあにが、使命だ。馬鹿馬鹿しい。」

そう言つや男は、神聖な作りの分厚い本を乱暴に投げ捨てた。  
それは鈍い音をたて床へと落ち、音もなく焼失する。  
それを冷たい眼で一瞥し、男は視線を別の場所に移す。そこには、  
遙か天へと聳え立つ塔が僅かに存在を主張していた。  
まるで、誰かに気付いてもらえる様、遠くまで訴えかけているかの

۱۶۰

「皮肉なもんだ。神に一番遠いもんが、天に一番近い場所にいるんだからな。」

彼の喰きが塔に届く事は勿論ない。そしてこの男も、塔の中からの叫びに気付く事は無い。

「せりきかわい、何をぶつけて置いたひるの？」

「ん？」  
そんな男の元に、小柄な少女が問い合わせた。

だが、男が答える前にその視線を机の上と僅かに焦げ痕が残る床にやると、少女は怒りに体を振るわせ、そして爆発した。

「あーーー！ 私まだ読んで無かつたのにいーーー！」

大粒の涙を溢しながら、あどけなさの残る瞳できつく睨んだ。一見微笑ましい兄弟喧嘩ともとれる光景だが、少女の手に握られていた小型銃が不気味に笑っていた。

「ちょつ！…あんなん読む価値もねえだろが！つか、それ下ろせっ

! !

少女が暴走すると中々止められない事を身に染みて知っている男は、内心舌打ちをしながら解決策を模索していた。しかしその苦労を無駄にするかの如く、少女は主張するのだ。

「読んで滅茶苦茶に破るのを、楽しみにしてたの……」

ああ、終わった

一瞬、人生を諦めた男であつたが、直ぐに少女好みの”面白い噂￥”を思い出した。

これが駄目なら実力行使するしかないが、一か八かの賭けにてみる事にする。

「そ、そういうやな……」

切り出した瞬間、今にも引き金を引ひつとしていた指がピタリと止まつた。

男がこの好機を逃す訳がない。

「聞いたか？最近裏で騒がれてる、面白い噂があんだよ……」

「面白い、噂？」

案の定、噂好きの少女が食い付いた。

それにもしても、この少女に限らず、女という生き物は、どうしてこうも噂が好きなのだろう。

まあ、この疑問は、目の前の危機から逃れてからゆづくつと考えよう。

男は勿体ぶるかの様に深呼吸をし、そして不適に笑つた。

「孤高の塔の赤い怪物の伝説さ。なんでもその伝説、事実らしいぞ。しかも、だ。その怪物は、俺等の仲間 異端らしきぞ」

物語は、静かに動き出す。

やつと、終わったか……

不気味な程に神聖なその塔の最頂、この世界で一番天に近いと唱わ  
れる場所にそれは繫がっていた。

衣服を纏わず、産まれたままの姿で、雨風を防ぐ屋根すらも無いそ  
の場所で、痩せ細った四肢が鎖で繫がっていた。

それは僅かに胸を上下させており、確かに生きてはいたが、月明か  
りに照らされた瞳は、死人同然であった。

彼女自身、そうなつてまで生にすがる理由をとつに忘れてしまつた  
のだろう。

先ほどの様に、化け物と罵りながらも自身を貪る男達を受け入れ、  
自身と同じ境遇の仲間達を戸惑いすら感じずに手に掛ける事が、こ  
の17年で当たり前になつてしまつた。

そして、それをまるで他人事の様に”傍観”するのは、心を失つて  
しまつたからだ。

「まだ、続くのか？」

小さく呟き、彼女はその瞳を閉じた。

その背に、妖しく月明かりに照らされる彼女が化け物である証、深

紅の大翼を携えながら。

異端を嫌う世界は、このセントラルを中心に長年に渡り、異端を排除すべく様々な手を打ってきた。しかし、どの計画も殲滅まではいかず、そして17年前、一人の神官が唱えた案により、彼女は囚われる事になる。

その計画とは、名を  
「イレイシス」。

異端は、人外の力を持つ者が多く、生身の”平凡”な人間が立ち向かうには強大であった。その為、一人の異端を排除する際には数十の命が毎回失われていたのだ。

しかしこの計画により、この17年での犠牲者は0となっている。最も、ただの人間の犠牲者は、だが。

「イレイシス」は、単純に異端と異端に殺し合いをさせるのだ。セントラルが数名の異端を生け捕りにし、それを飼い慣らして道具として使う。

その道具の中に、彼女もいた。彼女は、イレイシスとして最年少で、そして最強だった。この17年で、23人いたイレイシスも、今では彼女ののみとなっている。

さらに不幸であったのが、彼女は美しかった。人間としても、異端としても美しすぎた。

流れる黒髪、ルビーを思わせる瞳、薄い唇、象牙色の滑らかな肌、深紅の翼は異端には女神に。

そして、人間の男にとつては、都合の良い欲望の捌け口として。そんな彼女には、記憶が無かつた。

彼女の記憶の始まりの日は、人生の終わりの日だったのだ。

こんな化け物にも人間にもなれない彼女は、今日もまた、人間の道具として使われる日をただ眠つて待つ。食事も僅かしか貰えず、痩せた体に長年繋がれた鎖によるどす黒い痣をさらに濃くし、そして男達に蹂躪されながら

そしてまた、彼女が飛べる日が来る。決して自由には飛べない、可哀想な籠の鳥は弄ばれる日が。

ガチャーンッ！！

「起きろ」

それが合図である。

翼の鎖を引かれ、まず体を清めに行く。けれど、温かい湯は彼女の罪と心を洗い流してはくれない。

そして、用意された服へと袖を通すのだ。

黒いドレスは、彼女の美しさを引き立たせる。彼女は、人間の完璧なペットであった。

塔の中間にある一部屋は、彼女が指令を出される場所。塔の中で唯一、生活感のある部屋であった。そこにはクリアの壁で隔たれてお

り、この国の重役がその向こうから彼女に命じる。

「今回のターゲットは、そいつだ」

純白の法衣に身を包んだ男は、彼女の姿を目にもやらずに言った。その言葉に合わせて、彼女の鎖を持つ若者が一枚の写真を渡す。そこに写っていたのは、優しげに微笑む一人の女性。

それを目に焼き付けて、彼女は瞳を伏せた。何故この人なのか、化け物と決められた理由は何なのか。そんな疑問など浮かばない。

しかし、この後の出会いが、彼女と世界を動かす切っ掛けになるのだった。

勿論、彼女はそれを知るよしも無い。

任を受けた彼女は、再び塔の最上に来ていた。今は、その身を縛る鎖は無い。

軽くなつた体で風を感じ、暫し仮初めの自由を味わつた彼女は、深紅の大翼を羽ばたかせた。

「分かつていいだろうな？」

それを黙つて見ていた若い兵士は、一言を口にする。

これは、17年続くやり取りだった。

この役をする人間は、何度変わってきたのだろうか。

彼女は、言葉の変わりに自身の首に触れる。

そこには、黒い首輪。

彼女がここに戻つて来る理由。

「行け、アリス」

それを合図に、彼女は闇夜に飛び立つた。

黒髪を靡かせ、深紅の翼を羽ばたかせるその女の名は、アリス。

コードネーム - A L S -

何も持たない、儂く美しい悪魔の化身である。

「私の護衛を？」

「え、ええ……」

肩までのブロンドの髪に、良く映えるワインレッドのドレスを着た女性が、メイドの話を聞いて暫し思索していた。

「どなた方？」

質問を受けた初老のメイドは、困惑した様子で答えた。

「それが、青年と少女として。お引き取り願つたのですが、聞き入れてくれないので。申し訳御座いません。本来ならば、私どもで処理しなくてはならないのですが……」

メイドがあまりにも申し訳なさそうだったので、その女性は苦笑しつつも、既に自分に起る事を覗透していた。

この女性の名は、ウイスカ。  
ウイスカ＝コンシアル。

小さな国の伯爵令嬢であり、そして、アリスが見せられた写真の女であった。

「やうね。折角だから、此方に通してあげて。」

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

「ふあーーでかいねー。」

ピンクのウーブの髪を背中で揺らし、無駄に女の子チックなワンピースの少女が感嘆の声をあげた。

その隣では、背の高い赤毛の青年が厳しい目付きで佇んでいた。

「しつかし、本当に紅い魔物はこじこじへくるのー？」

反応を示さない青年に、半ば不貞腐れながらも少女が問い合わせると、青年は頷いた。

「当たり前だ。この辺りに住む異端は、もつていつしかいねえって言つてたからな。なんだ？お前は、リクアの読みを躊躇つ一つのか？」

「それは無いけどそー。でも……」

「あまりにも、堂々すうさんだら、この異端。」

「うん。でかいね」

「ああ。でかいな」

そう、青年は厳しい目付きをしていた訳ではない。ただ単に、呆け

ていたのだった。

自分達はばれない様、隠れ家でひつそりと生きているのだが、目の前の建物は普通の者からみても大きく、豪華だ。

一瞬、この差に嫉妬を覚えた一人だったが、すぐに思考を別のものへと変える。

「ねえ、入れてくれなさそうだよね。さっきのおばばとか、帰れ的一点張りだつたし。…………どうすんの？」

その問いに、青年は悪戯に笑った。

「そん時は、忍び込むに決まつてんだろ？」

しかし、青年はそう意気込んだが、彼が言つたと同時に屋敷の門が音も起らずに開いた。

まさか、こんなにもすんなりと入れるとは思つていなかつた一人は、思わず呆気に取られる。

二人ともが、一步を踏み出せず、暫しその場で開いた門を見つめていた。

”なにをしているの？せっかく、正規に招き入れてあげるというのに……”

するとどうだらう、二人に声を掛ける者がいたのだ。いや、正確には、頭に直接語りかけてきた。

二人はこの感覚を、嫌という程知つてゐる。一人も、仕事の時に良く使用するのだ。

これは、異端特有の力。言葉を介さず、もっと深い所で繋がつてゐる絆の証だ。

彼等が田をつけた者が、はつきりと異端だと分かつた今、戸惑い躊躇する必要は無かつた。

目的と野望の為、二人は屋敷の門をくぐつた。

刻は夕暮れ。この刻はまだ、闇に佇む魔物は、繫がれている。

\* \* \* \* \*

「アカガキタヨー！」

「ヒサシブリノアカガキタ！」

アリスが空を飛び始めると、その周りを数多の鳥が囮み始めた。  
夜間は活動出来ない筈の鳥達は、彼女との再会を日々に喜び、嘶いている。

勿論、彼等の言葉を人間が理解出来る訳がない。理解しようともしていらない。

しかしアリスは、人との関わりを学ぶ期間が無く、最低限のコミュニケーションも取れない程に言葉も拙かつた。しかしその変わりに、彼等との絆を育む事が出来たのだ。

彼等の言語は共通であつたので、鳥類だけ無く総ての生き物、言つなれば猛獸から木々、風までもと会話が出来るのだ。だが、彼女の

短時間の自由では、風と空を生きる世界とする鳥だけが、友となれた。

「ひわし……ぶり」

「アイカワラズ！アリスハ、コトバガニガテー！」

既に膨大な数の鳥が囮んでおり、端から見ると、それは闇夜に浮かぶ雨雲にも見えるのだろう。

アリスは目的の場所へと向かいながら、暫し彼等との会話を楽しんでいた。

彼女に自分の感情が理解出来たのならば、楽しんでいたと言える。しかし、彼等との会話中、胸に宿る温もりの正体が何なのか、今の彼女に分かる筈はない。

鳥達も、自分達以上に純粹な心を持つが、残酷な運命と汚れた手を持つアリスが、哀れであり、穢らわしくも思うが、何よりも愛しいのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2934e/>

---

私が得た世界

2010年12月3日06時17分発行